

小学校第1学年音楽科教材から読み解く、幼小接続の一考察

坪井 眞里子

Thinking about the Connection from Kindergarten to Elementary School, Reading from the Teaching Materials in Music for the First Grade in Elementary School

Mariko TSUBOI

【抄 録】

2020年度から小学校では、改訂された学習指導要領に基づき授業が実施されている。それに先んじて幼稚園では、2018年度から改訂幼稚園教育要領が全面実施となっている。今回の幼稚園教育要領では幼小接続が重視されており、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど小学校との連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図ることが求められている。本稿では、小学校音楽科の教科の観点から、小学校入学当初の子どもに求められる資質・能力について考察を行った。小学校音楽では、幼児期の音楽表現やそれに伴う聴く姿勢がより明確な意図を持つ。本論では、幼稚園教育要領に記されている「幼児らしい様々な表現を楽しむ」「表現する意欲を十分に発揮できる」「表現する過程を大切に自己表現を楽しむ」を踏まえ、より自発的な「音楽を体感する」活動を行うことの重要性を、音楽科の教科書・教材から検証した。幼稚園教諭、保育者は、幼児期に遊びや、生活の中で、自然に触れ育まれる自発的な表現力を、柔軟に受け止める姿勢が必要となる。本論における分析と考察を踏まえ、幼児の表現領域において「音楽を体感できる」体験の重要性を再認識した。

キーワード：幼小接続 音楽科 教科書 表現

1. 緒 言

2017年3月の幼稚園教育要領改訂、2018年保育所保育指針の改定で、幼小接続の重要性を明確に打ち出した。幼児教育において子ども理解に重点を置き、主体性を重んじた資質や能力の育成という共通の柱を軸として、内容の構成が行われている。健康・人間関係・環境・言葉・表現に基づいた5つの領域が保育の基本となり、幼稚園・保育園・こども園において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明記された。幼児期の終わりに育ってほしい10項目は、小学校での学習に向かう礎となる姿となる。音楽においては、表現・言葉からの関連性が主なものとなるが、幼稚園・保育園の場では、改訂により、より総合的な表現の考え方が重要となっている。総合的な表現領域の中には、音楽、言葉、造形、身体表現等が含まれる。遊びや、生活の中で、自然に触れ育まれる主体的な表現を育む姿勢である。幼小接

続が課題となる現在、幼稚園・保育園の取り組みから、小学校での学びにどのように結びつき、どのような資質・能力が求められるのであろうか。本稿では、音楽科において、小学校入学時に求められる資質・能力と、どのような過程で接続していくかを教科の観点から考察を行う。方法と手順は以下の通りとする。

方法：小学校音楽科の教科書として採択された2社の教科書、教育芸術社、教育出版について、第1学年始めの題材・教材を分析する。

手順：各教科書教材の学びの過程やねらいを基に、教材の学びのポイントを考察する。考えられる学びのポイントを小学校学習指導要領音楽科の内容と照らし合わせ、必要な資質や能力について導き出し、考察を行う。

2. 教育芸術社「小学生のおんがく1」¹⁾ 扱い月4月 音楽科はじめの学び

教育芸術社「小学生のおんがく1」について、扱い月の目安が4月の題材と教材を検証していく。

題材1「うたっておどってなかよくなるろう」

「うたってなかよし」教材：幼児歌曲

「ともだちと いっしょにおどりましょう」教材：「セブン ステップス」鑑賞

「みんなで あそびながら たのしく うたいましょう」教材：「ひらいた ひらいた」

歌唱共通教材

以上3つの教材で構成されている。以下、それぞれの教材について内容の分析と学びの検証を行う。以下分析から得た学びポイントについて*0で示す。

(1) 「うたって なかよし」

ここでは、学年のオリエンテーション的な役割をねらいとしている。歌唱教材として、以下の10曲が挿絵の中に描かれている(図1)。「ちょうちょう」「ちゅうりっぷ」「ぞうさん」「めだかのがっこう」「おつかいありさん」「いぬのおまわりさん」「こどりのうた」「こいのぼり」「こぶたぬきつねこ」「めだかのがっこう」



図1 「うたって なかよし」 「小学生のおんがく1」 pp: 6-7 教育芸術社 (令和2年)

活動内容としては、「えの なかから うたを みつけて、いっしょに うたいましょう」が提示されており、子どもは、視覚を通して、曲を想起することが課題となる。予備知識として曲の歌詞の内容と、絵が合致することが必要となる。挿絵では、登場動物に表情があり、曲の内容

のイメージや気持ちを表している。これらは、曲を歌うときの曲想に関わる事項である。視覚的な教材は低学年においては、より効果的である。

*1 挿絵→場面→曲の内容 曲の内容の理解が必要

*2 挿絵→動物→表情→曲想→歌い方 曲の内容のより深い理解が必要（気持ちの理解）

「うたって なかよし」では、学習指導要領との関連について、指導書²⁾において、A表現（1）ア、イ、ウ（ア）（イ）（ウ）が記載されている。第1学年の目標及び内容については、以下の通りとなる。³⁾

2 内 容

A 表 現

(1) 歌唱の活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 歌唱表現についての知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲想を感じ取って表現を工夫し、どのように歌うかについて思いをもつこと。

イ 曲想と音楽の構造との関わり、曲想と歌詞の表す情景や気持ちとの関わりについて気付くこと。

ウ 思いに合った表現をするために必要な次の（ア）から（ウ）までの技能を身に付けること。

（ア）範唱を聴いて歌ったり、階名で模唱したり暗唱したりする技能

（イ）自分の歌声及び発音に気を付けて歌う技能

（ウ）互いの歌声や伴奏を聴いて、声を合わせて歌う技能

学習指導要領との関連について、教材と照らし合わせて考える。指導書においては、A表現（1）イとウ（ウ）の2項目について、主となる内容（◎）とされている。この2項目について検証する。

A表現（1）イ：曲想と音楽の構造との関わり、曲想と歌詞の表す情景や気持ちとの関わりについて気付くこと に関して、先に挙げた*1、*2のポイントが該当する。小学校でののはじめの授業であることから、子どもの音楽経験によって相違がでてくることが予想される。

（ウ）互いの歌声や伴奏を聴いて、声を合わせて歌う技能 について、互いの声を聴きながら、伴奏に合わせて歌うという技能になる。伴奏については、指導者の鍵盤楽器による伴奏とCD等の音源を利用した伴奏が考えられる。指導者が鍵盤楽器で伴奏することが、より効果的に子どもの「声を合わせるアンサンブル」の学びを深めると考える。これは、「耳を育てる」とこと関連する。また、子どもの音楽経験によっても違いが予想される。幼稚園や保育園、こども園での歌い方によって、子どもの歌い方の価値観に違いがあると考えられる。この点に関しては、幼児期、指導者の「大きな声で」「元気よく」が、幼児期のがなり声の原因となる場面を散見する。「耳を育てる」という意味では、友達の歌を聴く、声を合わせると過程が重要となる。周りの声を聴きながら、声を合わせて歌い、クラス全員で一つの音楽を作るという認識の第一歩となる。

*3 幼児期の歌に関するとりくみや体験の違い（選曲、行事の取扱い等）

*4 歌う→友達の歌を聴く→伴奏を聴く→声を合わせる→一つの音楽を作る

*5 指導者の歌う声の価値観→子どもの歌う声の価値観の一致（幼児期の体験）

(2) 「ともだちと いっしょに おどりましょう」教材「セブン ステップス」

「セブン ステップス」で初めての鑑賞授業として位置づけられている。鑑賞としての教材観

を考えた場合、共通事項が関わってくる。「セブン ステップス」では、音楽を聴き、身体を動かすことに関連付けている。音楽を体感する実践である。身体を動かすことから、自然に拍感を感じ取ることができる。また、この曲には英語が言語で、日本語訳の歌詞もついている。歌を聴き、音楽に合わせて、身体を動かし音楽を感受する。数を数えるというところで、算数科との関連性もある。歌いながらできる子どももいることが予想される。英語で歌う場合は、リズムと言葉が合致するが、日本語の場合はアクセントの違いや、母音の流れを中心とする日本語の単語が、旋律に合致せず、曲の良さが引き出せないと考える。



図2 「ともだちと いっしょに おどりましょう」「小学生のおんがく1」
pp: 8-9 教育芸術社 (令和2年)

*6 音楽→聴く→身体を動かす (体感) →拍感の感受→拍の知覚

指導書においては、鑑賞の世界の遊びうたに親しむという扱いである。また、学習指導要領との関連でB鑑賞ア・イが主たる内容とされている。以下学習指導要領B鑑賞について記す。⁴⁾

B 鑑賞

(1) 鑑賞の活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 鑑賞についての知識を得たり生かしたりしながら、曲や演奏の楽しさを見だし、曲全体を味わって聴くこと。

イ 曲想と音楽の構造との関わりについて気付くこと。

アに関して、**知識**とされる事項は、リズムと拍の関わりについて挙げられている。身体の動きを伴った拍の認識となる。スモールステップで拍感の知覚へと繋げることを意図している。**曲や演奏の楽しさ**については、軽快なリズムに合わせて、友達と活動し、テンポ感の変化を楽しみ音楽に合わせる楽しさを味わう*7。

イの曲想と音楽の構造の関わりについては、1年生の始めであることから、「セブン ステップス」の曲の構造について具体的な理解をすることは、難しいと考える。リズムと歌詞(言葉)旋律について規則性を、遊びながら認識し覚えることで、自然に曲想を体感することでできれば良いと考える。

*7 テンポの変化で、身体動作の緩急をつけることができる能力

(3) 「みんなで あそびながら たのしく うたいましょう」教材：「ひらいた ひらいた」

歌唱共通教材である「ひらいた ひらいた」は、江戸時代後期頃から歌われた、わらべ歌である。

わらべ歌の中でも輪遊び歌に分類される。前時の「セブンスステップス」が世界の遊び歌として教材とされ、この單元では日本の遊び歌となる。「ひらいたひらいた」は、明治時代に提唱された唱歌遊戯に合致する。歌詞の内容に即した動きとなっている。教材としては、一人での活動・グループでの活動、クラス全体での活動ができる。歌詞の中の「れんげの花」はここでは、「蓮の花」のことであり、教科書でも絵と写真で示されている。この点は、知覚に該当する。一人で遊ぶ場合は、手で小さな花を作り、歌と共に花のようにひろげたり、小さくつまませる動きとなることが予想される。



図3 「みんなであそびながら たのしくうたいましょう。」「小学生のおんがく1」
pp：9-10 教育芸術社（令和2年）

また、この教材で始めて曲の構造についての認識を具体的に認識することができる。歌詞の内容が問いと答えの構造になっており、歌詞から容易に理解することができる。音楽の構造として基本的構造の一つになる。

問い「ひらいた ひらいた なんのはなが ひらいた」

答え「れんげのはなが ひらいた」

全員「ひらいたと おもったら いつのまにか つぼんだ」

問いと答えでの交互唱もできる教材である。指導者はすぐに、動作を伴った活動に移行せず、まず歌唱から入り、曲の歌詞の内容について、理解を進めた上で、身体動作の工夫をする活動を行うことが、ポイントとなる*8。

*8 歌詞や曲想→イメージ→身体動作の工夫→友達と一緒に表現する

*9 歌詞→内容の理解→構造についての気付き→全体の構造の理解

学習指導要領の関連性については、主となる内容について「ア 歌唱表現についての知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲想を感じ取って表現を工夫し、どのように歌うかについて思いをもつこと。」が示されている。歌唱表現の「知識」については、前述の歌詞の内容の理解が該当する。交互唱などで、聴きあいながら声を合わせて歌う技能を身に付ける。また、曲想に合わせて、イメージや歌い方、動きの工夫をすることが学びのポイントとなる。

以上の内容が教育芸術社の教科書における小学校第1学年始めの教材となる。これらは、入学後の第一歩であり、音楽の歌や遊び（身体的動作・表現）を通してコミュニケーションを持つことで、学びの要素を加味しながら友達づくりも示唆している。

（4）音楽科における1年生の姿（教育芸術社）考察

この題材について、分析から得た学びのポイントを学習指導要領の「内容の構成」と照らし合わせる。(ア：思考力・判断力・表現力 イ：知識 ウ：技能)

- *1 挿絵→場面→曲のイメージと内容 曲の内容の理解が必要 ア・イ
 - *2 挿絵→動物→表情→曲想→歌い方 曲の内容のより深い理解が必要 ア・イ
 - *3 幼児期の歌に関するとりくみや体験の違い(選曲等) イ
 - *4 歌う→友達の歌を聴く→伴奏を聴く→声を合わせる→一つの音楽を作る ア・ウ
 - *5 指導者の歌う声の価値観→子どもの歌う声の価値観の一致(幼児期の体験) ウ
 - *6 音楽→聴く→身体を動かす(体感)→拍感の感受→拍の知覚 ア・ウ
 - *7 テンポの変化→身体動作の緩急 ア・ウ
 - *8 歌詞や曲想→イメージ→身体動作の工夫→友達と一緒に表現する ア・イ・ウ
 - *9 歌詞→内容の理解→構造についての気付き→全体の構造の理解 イ
- ここまで行った題材・学びのポイントから、以下のように評価の観点をまとめる。

ア思考力・判断力・表現力

- ・挿絵から曲をイメージできる。
- ・曲の内容を理解し、工夫して表現ができる。
- ・歌詞から内容の理解(気持ちや雰囲気)ができる。
- ・テンポやリズムを感じ取り、表現することができる。
- ・リズムや拍、テンポの変化に気付くことができる。
- ・歌詞の内容から、身体動作を工夫し、考えた表現ができる。

イ知識

- ・挿絵から曲の内容を想起できる。
- ・簡単な「問いと答え」の音楽の構成に気付くことができる。

ウ技能

- ・声を合わせて歌うことができる。
- ・歌詞の内容から、身体動作を工夫し、考えた表現ができる。

共通事項としては、これらの活動を通して、リズム・拍・旋律の音楽を特徴づけている要素について、体感することが示されている。

3. 教育出版「おんがくのおくりもの1」⁵⁾ 扱い月4月 音楽科はじめの学び

次に教育出版社「おんがくのおくりもの1」について、始めに提示された教材内容の分析と学びの検証を行う。教材内容は以下の通りである。

「どんなうたがあるかな」

「おんがくに あわせて あるこう」「ゴー アンド ストップ」鑑賞

「うたにあわせて かもつれっしゃになって あそぼう」「かもつれっしゃ」

「おんがくに あわせて からだをうごかそう」鑑賞

「うたにあわせて おはなになって あそぼう」「ひらいた ひらいた」歌唱共通教材

「わらべうたで あそぼう」「おちゃらか」「なべなべ」

「うたにあわせて みぶりで あそぼう」「かたつむり」歌唱共通教材

教育出版社の教科書では、以上7つの教材が、はじめに提示されている。これらは、4月から6月にかけて行われると推定する。題材としては、「1. リズムと なかよし」が1学期後半

に位置づけられており、先に示した7つの教材は、授業を始めるまでの十分な導入として扱われている。教育出版の教科書は、改訂された学習指導要領実施にあたり、はじめの教材を大きく改変している。図4は、改訂前の教材はじめの目次、図5は、改訂後の目次である。改訂前は、



図4 「おんがくのおくりもの1」教育出版 (平成28年)

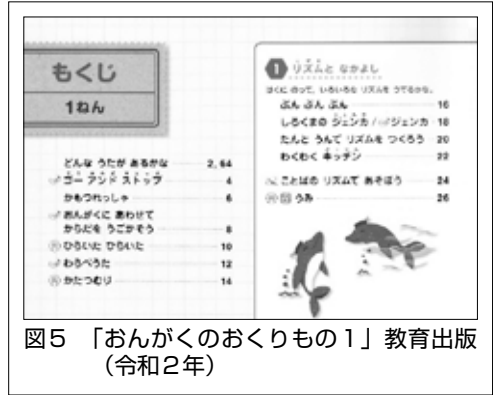


図5 「おんがくのおくりもの1」教育出版 (令和2年)

「さんぽ」「知っているうたをみつけて みんなでうたおう」のみが、導入として提示されている。改訂後は、改訂前の題材1「おんがくに あわせて」全てが、幼稚園・保育園等の内容と関連付けながら導入として取り扱われている。よって、改訂後の7つの教材に関しては、学習指導要領に則した評価の必然性はなくなる。教師用指導書・研究編⁶⁾においても、題材の評価基準は「1リズムと なかよし」以降で提示されている。学習指導要領との関わりについては、表1のように示されている。教材は学習としての題材の位置づけではないが、幼児教育からの導入としての7つの導入教材の教材性について、以下検証していく。分析から得た学びのポイントについて*0と記す。

表1 学習指導要領との関わり⁷⁾

第1学年	A表現						B鑑賞		共通事項		他教科との関連			
	(1)			(2)			(3)					(1)		
	ア	イ	ウ	ア	イ	ウ	ア		イ			ア	イ	
どんなうたがあるかな	○	○										○		幼保
ゴーアンドストップ										○	○	○		
かもつれっしゃ	○	○										○		
サンダーバード他										○	○	○		
ひらいたひらいた(歌唱共通教材)	○	○	○									○		
わらべうた										○		○		
かたつむり(歌唱共通教材)	○	○										○		

(1) どんなうたがあるかな

はじめの教材は、教育芸術社と同様に、挿絵から歌を想起し歌う活動である。挿絵の中に「ちゅうりっぷ」「ちょうちょう」「ことりのうた」「やぎさん ゆうびん」「おつかいありさん」「ばすごっこ」「かえるのがっしょう」「こいのぼり」「いぬのおまわりさん」「めだかのがっこう」の10曲が示されている。教育芸術社の教科書と同様に、子どもは、視覚を通して曲を想起する

ことが課題となる。必要となる予備知識として、曲の歌詞の内容と、絵が合致することが必要となる。この点では、*1、*2が該当する。教育芸術社との違いは、「かえるのがっしょう」が教材とされていることである。簡単なカノンの活動ができる可能性がある。斉唱だけではなく、慣れ親しんだ曲で音の重なりを体感し、友達と声を合わせる楽しさを味わうことができる。また、子どもは少しずつ難しくレベルアップすることで、やる気アップの傾向にあることから、有効な教材であると考えられる。しかし、幼稚園や保育園の活動によっては、カノンを実施していないことも予想される。この点については、歌う声の価値観同様、これまでの音楽経験によって差異が生じる可能性がある。前述の*3、*4、*5が同じく該当する。しかしながら、ここでは長いスパンで音楽経験の違いについても、園での学びを関連付けながら、音楽科の学びに繋げる過程となっている。

- *1 挿絵→場面→曲のイメージと内容 曲の内容の理解が必要
- *2 挿絵→動物→表情→曲想→歌い方 曲の内容のより深い理解が必要 (気持ちの理解)
- *3 幼児期の歌に関するとりくみや体験の違い (選曲等)
- *4 歌う→友達の歌を聴く→伴奏を聴く→声を合わせる→一つの音楽を作る
- *5 指導者の歌う声の価値観→子どもの歌う声の価値観の一致 (幼児期の体験)

(2) 「おんがくに あわせて あるこう」「ゴー アンド ストップ」

鑑賞教材の位置づけで、曲に合わせて「進む」「止まる」の活動をする。ここでは、聴くのみでの鑑賞ではなく、「耳を育てる」「音楽を体感する」活動を中心としている。曲は高倉弘光⁸⁾作曲で、音楽をよく聴き、身体動作、拍や曲想、リズムを体感するために作られた曲である。「ゴー アンド ストップ」は3つの音源が以下のように用意されている。



図6 「おんがくに あわせて あるこう」「おんがくのおくりもの1」 pp : 2-3
教育出版社 (令和2年)

- 1) 途中でバグパイプの音が聞こえたり、「ロンドン橋の上で」「アビニョンの橋の上で」など子どもに馴染みのある曲が現れたりする。
- 2) 短調やワルツ (3拍子) がある。
- 3) 「アビニョンの端の上で」があらわれるが速さに変化がある。

聞き覚えのある曲の旋律が入っていることは、子どもにとって興味深いものとなる。また、バグパイプの音色も予想できない展開であり、より集中力が増すと考える。教師用指導書に以

下のように書かれている。「音楽がピタリと止まる」ところで、体の動きもピタリと止めます。ここが非常に重要です。音楽を聴いて体を動かす意味はここにあります。子ども自身と音楽とが一体になることで、その音楽のもつ要素や性格をより感じ取ることができるのです。」⁹⁾ また、学習指導要領に「音楽との一体感を味わい、想像力を働かせて音楽と関わることができるよう、指導のねらいに即して体を動かす活動を取り入れること」と示されている。小学校での第一歩として、音楽を形作る要素を導入段階で体感する活動を行うことは、これからの音楽科の学びの基本的な視点や態度を示す上において大きな意味があると考えられる。ポイントとしては、以下の通りである。

*6 音楽→聴く→身体を動かす（体感）→拍感の感受→拍の知覚

*7 テンポの変化→身体動作の緩急

*10 音楽を注意深く聴く→集中力

*11 音楽（言葉のない曲）→曲のイメージを持つ→体を使って工夫して動く

(3) 「うたにあわせてかもつれっしゃになってあそぼう」「かもつれっしゃ」

この曲は幼稚園や保育園でも経験がある可能性が大きい。別名「じゃんけん列車」としても知られている。リズムの中に、シンコペーションが現れるが、耳慣れた歌であるので、自然に歌うことができると予想される。この曲で歩く時、またじゃんけんて負けた方が連結していくことにより、全員で拍感を体感する活動を行うことになる。また、教師がタンブリンやウッドブロックで拍節を打ち、音が聞こえている間は歌いながら動く、音が止まったら列車も止まる、というように、「ゴー アンド ストップ」での規則を取り入れることも、可能である。音楽に合わせて動くことを身に付け、拍感を楽しみながら身につけることができる。

*6 音楽→聴く→身体を動かす（体感）→拍感の感受→拍の知覚

*7 テンポの変化→身体動作の緩急

*10 音楽を注意深く聴く→集中力

(4) 「おんがくに あわせて からだをうごかそう」

ここでは、教材として5つの楽曲が提示されている。曲の速さやリズム曲想が全く違う曲が選曲されている。

①「サンダーバード」グレイ作曲：1965年に放映された特殊人形劇シリーズのテーマ曲である。力強い行進曲で、拍節感がわかり易い曲である。曲想を感受できた場合、力強く拍をはっきりと感じ取って歩くことができる

②「どうけしのギャロップ」カバレフスキー作曲：運動会などで頻繁に使用されるテンポの速い曲である。ギャロップは、馬術での全速力を意味している。曲名の通り、木管楽器、シロフォン、弦楽器によってリズムが刻まれ、下降する旋律とともに、歯切れよく演奏される。

③「ピンクパンサーのテーマ」マンシーニ作曲：サクソフォーンによってテーマの旋律が怪しげな雰囲気とともに奏でられる。冒頭、スタンドシンバルによって緊張感が増す。用心しながら、抜き足差し足で歩くことが予想される。ジャズ風な曲想で、子どもの感受によって、どのような動きになるか楽しみな教材である。

④「なみをこえて」ローサス作曲：ウィンナーワルツ風な曲想である。円を描くような3拍子で、一小節の一つに感じることもできる。3拍子は、一般的に難しいとされているが、伴奏の1拍目の強拍を意識することができれば、感受することも可能である。3拍を一つにとって揺れる体の動きで、ワルツを体感できる。流れるような滑らかな曲想から、他の楽曲との比較が効果的である。

⑤「ぞう」サン・サーンズ作曲：「動物の謝肉祭」の第5曲。コントラバスによって、ゆっくりと3拍子で演奏される。大きな象のイメージで、3拍子にのって重々しく踊る象の動きがイメージされる。テンポがゆっくりであることから、他の4曲と比較して感じ取ると、明らかな違いがあることがわかる。

以上5曲をまず、鑑賞として聴き、聴いた印象を言語化したのちに、身体を使って動く動作をする。感受したことを言語化、そして体感する過程を行うことによって知覚に結びつけることができる。違いのはっきりした5曲の違いに気づくことができることも狙いの一つである。ただ漠然と動く活動にしないことが重要なポイントとなる。

*6 音楽→聴く→身体を動かす(体感)→拍感の感受→拍の知覚

*7 テンポの変化→身体動作の緩急

*10 音楽を注意深く聴く→集中力

*11 音楽(言葉のない曲)→曲のイメージを持つ→体を使って工夫して動く

(5)「うたにあわせておはなになってあそぼう」「ひらいた ひらいた」歌唱共通教材

「ひらいた ひらいた」は、前述の通り1年生の共通教材である。教育芸術社との扱いの相違点は、導入として取り扱っていることにある。また、教育芸術社は直前に世界の遊び歌を教材にしており、日本の遊び歌として「ひらいた ひらいた」の位置づけを行っている。活動の内容としては、歌詞の内容の把握から、花の様子をイメージして、一人での活動・グループでの活動・また全員での活動に繋げることができる。交互唱をすることで、問いと答えの構造を知覚することができる。

*6 音楽→聴く→身体を動かす(体感)→拍感の感受→拍の知覚

*8 歌詞や曲想→イメージ→身体動作の工夫→友達と一緒に表現する

(6)「わらべうたであそぼう」「おちゃらか」「なべなべ」

前時の「ひらいた ひらいた」に続き日本のわらべ歌を取り扱っている。「おちゃらか」ではテンポに変化を取り入れながら、拍を感じ取り、じゃんけん遊びを歌いながら、楽しむことができる。1年生当初に、友達とのコミュニケーションを深めることが期待できる。



図7 「わらべうたであそぼう」「おんがくのおくりもの」 pp: 12-13
教育出版社 (令和2年)

「なべなべ」では、動きの工夫を行い、2音(ソラ)又は3音(ソラシ)(ミソラ)で構成される日本の旋律観を味わうことができる。教科書(図7)「うたでおはなし」では、友達や先生との会話の試みの示されており、これらは、2年生、3年生の音楽づくりにも関連付けられ

る。日本のわらべ歌に親しみ、身近にある伝承遊びの視野を広げることがねらいとなっている。

(7) 「うたにあわせてみぶりであそぼう」「かたつむり」歌唱共通教材

「かたつむり」の教材では、「うたにあわせてみぶりであそぼう」と示されているように、歌の歌詞や楽曲のリズムに合わせた動作をすることが目標となっている。これまで、導入において、曲を聴きながら、拍を感じたり、リズムやテンポの変化で音楽と共に、身体を動かす活動をしてきた。音楽は身体で感じ取るものという前提が、認識されてきた。ここで、子ども達は「かたつむり」の歌詞や、付点のリズム、拍感を感じながら、どのように動くのがふさわしいか考え、工夫して、各々の価値観のもとに音楽を深めることが可能となる。生活科とのかかわりで、かたつむりの「あたま」や「つ」の「めだま」の調べ学習を行い、歌詞の内容を確かめることも予測される。教科書に掲載されている、動きの写真も参考にできる。曲の構造については、歌詞の内容から、問いと答えの構造であることから気付くことができる。また図8のリズムの繰り返し（でんでんむしむしかたつむりおまえのあたまはどこにある）がこの曲を特徴付けている。拍にのってゆっくりと手拍子をしながら歌うことで、付点のリズムを体感できる。

図8 「かたつむり」リズムの特徴と歌詞

*6 音楽→聴く→身体を動かす（体感）→拍感の感受→拍の知覚

*8 歌詞や曲想→イメージ→身体動作の工夫→友達と一緒に表現する

(8) 音楽科における1年生の姿（教育出版）考察

教育出版の教科書では、7つの教材を通して、1年生当初の音楽科での活動を導入として取り扱っていることが、最大の特徴である。幼児期の幼稚園、保育園での音楽的な活動によって、音楽経験に、違いが見込まれる。それを加味して、子どもが、同じスタート地点に立てるように、音楽に関する感じ方や考え方を、しっかりと身に着けることができる内容となっている。指導書においても、「導入」として取り扱われており、学習の題材としては、「リズムとなかよし」から始まることになる。よって評価の観点はないものとする。1から7の教材を通して、「音楽を身体感覚で感受する」という視点が一貫している。学びのポイントとして付け加えた*10、*11については、評価の観点との関りは以下の通りとする。

*10 音楽を注意深く聴く→集中力 ウ

*11 音楽（言葉のない曲）→曲のイメージを持つ→体を使って工夫して表現 ア・ウ

導入の7つの教材について、題材としての扱いが無いため、評価基準ではないが、内容の構成について、評価の観点を以下に示す。

ア思考力・判断力・表現力

- ・挿絵から曲をイメージできる。
- ・曲の内容を理解し、工夫して表現ができる。
- ・歌詞から内容の理解（気持ちや雰囲気）ができる。
- ・テンポやリズムを感じ取り、表現することができる。
- ・リズムや拍、テンポの変化に気付くことができる。
- ・歌詞の内容から、身体動作を工夫し、考えた表現ができる。
- ・音楽（言葉のない曲）を聴いてイメージしたことを、体を使って工夫して表現する。

イ知識

- ・挿絵から曲の内容を想起できる。
- ・日本の伝承遊びを知っている。
- ・簡単な問いと答えの構成に気付くことができる。

ウ技能

- ・声を合わせて歌うことができる。
- ・音楽を注意深く聴くことができる。
- ・音楽（言葉のない曲）を聴いてイメージしたことを、体を使って工夫して表現する。

共通事項については、曲想や歌詞の内容から音楽を形作る構成に気が付く。また拍、速さ、リズムについて、7つの教材を通して課題となっている。

学習指導要領には、記載されていないが、「音楽を注意深く聴くことができる」を敢えて、「ウ技能」とした。音楽の変化を注意深く聴くことは、集中力を要し、一つの技能であると考える。

4. 考察—音楽科からみた1年生の資質・能力

音楽教科書、出版社2社について教材の分析を進めてきた。一見すると同じように感じられるかもしれないが、ねらいが大きく違う。まず、教育芸術社は始めの本題材を「うたっておどってなかよくなるう」としており、「友達づくり」を一つの課題としている。題材や教材のつながりとして、「学習の始まり」音楽は、目に見えない気持ちのやり取りを大切にする教科です。音楽的なコミュニケーション能力を高めるために、一緒に歌うことや体を動かすことから学習を始めます。」⁹⁾と記されている。小学校音楽科への接続（導入）として「声を合わせて楽しく歌う」体験を学年のオリエンテーションとしても位置付けている。「セブン ステップス」は、音楽に合わせて踊るということを目標としており、音楽を聴いて体を動かすという点においては、教育出版と同じであると解釈される可能性がある。しかし、教育芸術社の方は、すでに決まった「踊り」に基づいて体を動かすことになる。教育出版の音楽を聴いて、それに合わせた動きを各々が即時反動的に行うのとは区別しなければならない。また、題材として1単元として設定されており、評価が必要となる。「友達づくり」は複線的な目標であると推察する。もし「友達づくり」を目標とするならば、音楽科の題材として扱わない方がよいと考える。2社に共通して教材とされている「うたってなかよし」「どんなうたがあるかな」は、子どもの学びを進める上で、園での学びの一部を踏襲できることから子どもにとっても入り易い内容である。歌唱の活動においては、前述のポイント*5 指導者の歌う声の価値観→子どもの歌う声の価値観の一致（幼児期の体験）が関わってくる。ある幼稚園で降園時に「おかえりのうた」を大きな声、又は怒鳴り声にもなるような音程のない声で歌っている場面に出くわした

事がある。その場で園長先生が「元気よく歌っていいね。」言われたことで、この園では、「元気よく歌う」が子ども達に良いこととして、捉えられていた。この様な場面はよくあると認識している。この点に関して、小学校での音楽的な歌唱の価値観を教科の中で、変えていく必要がある。幼稚園・保育園の指導者の認識についても課題となる。

教育出版は、小学校音楽科への接続として、7つの教材を取り扱っていることが大きな特徴である。7つの教材を通して、音楽のとらえ方「音楽と一体になって動いてみる」を課題としている。内容的には、リトミック的な即時反応を取り入れている。教師用指導書にもあるように「鑑賞における体を動かす活動の効果」について「曲の気分を感じ取る」「曲の要素を感じ取る」「曲の構成がわかる」「表現媒体がわかる」¹⁰⁾とその有効性について記している。この一貫した導入から、子ども達は、幼児期のリトミック的な経験の有無にかかわらず、小学校音楽科の第一歩として、全員で音楽を聴き、体を動かす活動を体験することになる。2カ月足らずの体験から、「音楽と一体となって動く」という認識を持つことができる（図9）。

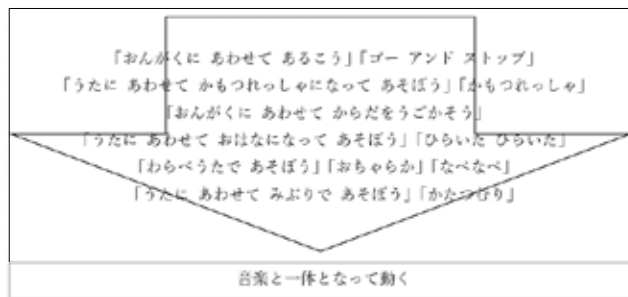


図9 第1学年 音楽科はじめの学びのイメージ

以上教材の内容、評価の観点から音楽表現の認識について、幼児期から小学校への接続において必要な資質や能力について以下の点が考えられる。

- ・挿絵やお話から歌を想起できる。
- ・リズムや拍、テンポの変化に気付くことができる。
- ・歌詞の内容から、身体動作を工夫し、考えた表現ができる。
- ・日本の伝承遊びを知っている。
- ・表現することの楽しさを味わう経験をもっている。
- ・声を合わせて歌うことができる。
- ・音楽（鑑賞）を聴くことができる。
- ・音楽に合わせて、動くことが少しできる。（振り付けのある「踊り」ではない。）

幼稚園教育要領 表現の内容の取扱いに記されている「幼児らしい様々な表現を楽しむことができるように」「表現する意欲を十分に発揮」「表現する過程を大切に自己表現を楽しむように工夫すること」を踏まえ、幼稚園教諭、保育者は、表現領域の視野を拡げ、遊びや、生活の中で、自然に触れ育まれる主体的な表現を柔軟に育む姿勢を持つことが、重要である。ねらいは、自発的な「音楽を体感する」表現力の育成にある。小学校入学時の資質・能力は、過去重視された楽器等の習得等ではなく、柔軟に表現できる創造性「音楽を体感できる」資質・能力にあると考える。

5. 結語

現在「幼児の音楽感受と身体表現」をテーマに研究を進めている。その中で課題となっているのが、「音楽の感受」である。幼児教育において、音楽に身体動作が加わる時は、大抵決められた振り付けの「踊り」となることが多い。そうした子ども達にとって、歌詞のない音楽に、自由な身体表現を求めるのは、大変難しいことである。幼児期に音楽そのものを、自分なりにイメージし、表現することの楽しさを味わうこと、そして、拍やリズムを体験できる活動を行う必然を強く感じる。園での活動において、音楽を体感できる時間を常時活動として、取り入れることで、始めて子ども達に、自由な表現が浸透するのではないかと考える。小学校での音楽科の学びでは、既にその内容が、始めの課題「音楽と一体になって動いてみる」となっている。本稿の考察を踏まえ、幼児の表現領域において「音楽を体感できる」体験の重要性を再認識した。

【謝辞】

本研究は名古屋女子大学 総合科学研究所平成31年度プロジェクト研究「幼児の音楽感受と身体表現」の一環として行ったものである。記して謝意を表す。

【注】

- 1) 小原光一ほか17名「小学生のおんがく1」教育芸術社 (令和2年)
- 2) 小原光一ほか17名「小学生のおんがく1」教師用指導書研究編 教育芸術社 (2020) pp14-15
- 3) 「小学校学習指導要領第2章 第6節 音楽」文部科学省 (2017年3月)
- 4) 前掲書
- 5) 新実徳英ほか21名「おんがくのおくりもの1」教育出版株式会社 (令和2年)
- 6) 新実徳英ほか21名「おんがくのおくりもの1」教師用指導書研究編 教育出版株式会社 (令和2年)
- 7) 前掲書p19からの再編集
- 8) 高倉弘光 筑波大学附属小学校教諭
- 9) 小原光一ほか17名「小学生のおんがく1」教師用指導書研究編 教育芸術社 (2020) p27
- 10) 新実徳英ほか21名「おんがくのおくりもの1」教師用指導書研究編 教育出版株式会社 (令和2年) pp : 42-43

【参考文献】

- 小原光一ほか17名「小学生のおんがく1」教育芸術社 (令和2年)
小原光一ほか17名「小学生のおんがく1」教師用指導書研究編 教育芸術社
新実徳英ほか21名「おんがくのおくりもの1」教育出版株式会社 (令和2年)
新実徳英ほか21名「おんがくのおくりもの1」教師用指導書研究編 教育出版株式会社 (令和2年)
『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 音楽編』文部科学省 平成29年7月
『幼稚園教育要領』文部科学省 平成29年3月